べり坊主が一枚加はつたのでは、その舌端を迸る瀧津瀬の奔流が律呂の相場を狂はすに相違ある。まいと、知る人は色を變へるだらうが、幸に内なる二人は、辨信の何者であるかをまだ知りませんでした。

七十二

魚山の來迎院に、聲明の博士と季爾秀才とを驚かした辨信法師は、座に招ぜられると、案外に愼しみ深く、簡單に來意を述べました。

御覽の通りの盲目の身、東夷東條の安房の國、清澄の山を出でゝより幾年月、世を渡るたつきとしては一面の琵琶、覺束ない音締めに今日まで通して來たが、琵琶は最後の思出に竹生島の明神へ奉納し、わが身は山科の光仙林にしばらく杖をとゞめてゐたが、山科よりは程遠からぬ處、こゝは大日本の魚山として聞えたる大原の來迎院こそは聲明の根本道場と聞くからに、こゝで修行をさせていたゞきたい、奥儀といふもおこがましいが、見えぬ世界を見んとする不具者の欣求心に御憐憫を下されたい、入門の儀、ひたすらに御紹介を頼み入ると、これは例の恋なる。廣長舌を弄することなく、極めて簡單明瞭に來意の要領を、まづ聲明の博士に向つて披瀝しますと、博士はその志を諒なりとして、院主上人に向つて、その希望を通じましたところ、院主上人は、また辨信の志を憐れんで、これに對面して、次のやうに申しました、

「金剛語菩薩卽ち無言語菩薩、聲明の奥儀を極めんとならば先づ聲無きの聲を聞くべし、幸に、この律呂の川の上に音無しの瀧がある、音無の瀧に籠つて、無音底の音を聞く氣はないか」

か樣に申されました時、辨信は、一議に及ばず、これこそ望むところとあつて、直ちに翌日の明星をいたゞいて坊を出で、音無の瀧に詣りました。

その日より、瀧のほとりに、さゝやかな安居の地を求めて、そこへ飛花落葉を積み重ね、正身の坐を構へると共に、心神を濟まして無音の音を聞かんとすることが此の法師の早天曉の缺かさぬつとめ、世間は暫く彼の廣長舌から免れるの自由を得ました。

七十三

有野村の與八が此の春から勸化をして歩いたことの一つに荒地の開拓と、ハト麥の栽培、ジャ

ガタラ薯の増産等があります。

與八は、その時、かう云つて村々に勸誘をして廻りました。

皆さん、何が怖ろしいと云つて、戰爭と饑饉ほど怖ろしいものは此の世にございません。地震だの、雷だの、火事だのといふものも怖ろしいには違ひありませんけれど、その災難の程度を比べると、戰爭や饑饉と比べものにはなりませんよ。戰爭はどうかすると一國の人を殺してしまひ、一つの國を亡ばしてしまふことがございます。饑饉も亦國中の人が、のたれ死をしてしまう事もございます、戰爭の事は人間のする事ですから、わし等にはわからねへですが、饑饉は天道樣のお仕置だから、わしも少しは知つてゐます、何しろ、人間が食へないで死ぬんでございますから、こんな悲慘な事はあるもんぢやあございません、でも、人間の力で、日頃の心がけがよければ逃れられない筈はねえと斯う思うんですが、それに就て皆さん、成るべく荒地を開いて、それにハト麥とジャガタラ薯とをお植えなさいまし、ハト麥は世間並の大麥や小麥と違つて、肥料がいりません、さうして、蒔いて僅かの間に取り入れが出來ます、その上に取穀が多いし、味がよろしいし、食べて藥用にもなるものでございます、種子はわしの處に澤山ございますから分けてお上げ致しますよ。

與八は電劍先生から聞き覺えたハト麥の栽培法を村人に傳授を致しました。それからジャガタラ薯もまだ作り方を知らない人に敎へてやりました。村人のうちには、ハイ〳〵と聞いてはゐるが、實行しない人も多くありましたが、與八は、それに頓着なしにハト麥の效能を說きながら、その種子を配り歩いてゐます。

饑饉といふものは怖ろしいものですよ、わし等も子供の時に見ました、野原にちつとも青いものがありませんでな、皆んな人間が摘んで食べてしまうです、それでも足りないで飢え死ぬ人が多くありまして、わし等が見ても、街道筋にゴロ〳〵行倒れが毎日のやうに倒れました、わしの大先生は心掛けのいゝ人ですから、さういふ時の用心がちやあんと出來てましたから、わし等はいくら饑饉でも、些ともひもじい思をした事はございませんでしたが、世間には明日食うものがない、今日食うものが無い、二三日食はないなんていふ人がザラにありました。

天保の年は四年と七年と二度も續いて饑饉がございましたが、七年の方が殊にひどうございました、其の年は春の初めから引續いて、季候が不順でございまして、梅雨から土用まで降りつゞいた上に、時候が大さう寒うございまして、日々毎日、陰氣に曇つてばつかり、晴れたかと思へば曇り、曇つたかと思へば雨が降る、と云つたやうな陰氣な年でございました。その時の事です、

相模の國の二宮金次郎といふ先生が、その年の季候を大さう心配しておゐでなさいましたが、土用にさしかゝると、もう空の氣色が何となく秋めいて來て、草木に當る風あたりが氣味の悪いほどヒヤ〳〵してゐましたが、ある時新茄子をよそから持つて來て呉れたものですから、その茄子を糠味噌へつけさせて食べて見ますと、どうしても秋茄子の味でございますから、これは只事では無えぞ、さあ村の人達よ、饑饉年が來るから用心しなさいと云つて、その晩、夜どほし觸れ書をつくつて諸方へ廻して、皆の者に勸めることには、明地や空地は勿論の事、木綿を植えた畑をつぶしてもいゝから、作をつくりなさい、蕎麥、大根、蕪菁、にんじん等を澤山お作りなさい、粟、稗、大豆等は勿論の事、すべて食料になるものは念を入れてお作りなさいとすゝめ、御自分では穀物の賣物があると聞くと、何でもかまはず、ドシ〳〵買入れ、お金が盡きた時は貸金の證文までも抵當に入れてお金を借り入れて、それで穀物を買ひ、人にもそのやうにおすゝめになりましたが、何をそんなに二宮樣がおあはてなさると本氣にしなかつたものもあるでございましたが、先生を信仰する人は、おつしやる通りにやつて大助かりに、助かつたさうでございます。

中には二宮先生の、そのお觸れ書を見て、直に馬に乘つて先生をおたづねして、その仕方を丹念に聞き取つてから、村々をお諭しになつて木綿畑をつぶし、お堂やお寺の庭までも蕎麥や大根

をお作らせなさいましたお奉行樣もありましたが、下野の國の眞岡近在は眞岡木綿の出る所ですから、木綿畑がうんとある、折角のその畑をつぶして他の作物を作ることをイヤがる人が多いには先生も困つたさうでございますが、その時に先生が、それではあきらめの爲に、木綿畑のいゝ處を少し殘して置いて見なと、所々へ一反位づゝ木綿畑を殘させて見ますと、秋になつて綿實が一つも結ばないので成程と、はじめて感心したさうでございます。

すべて、大偉人のいふことは聞いて置かなけりやなりません、わし等は、二宮先生のやうな大偉人ではございませんが、用心をしてしそこなひといふ事はございませんから、皆さん、何をさし置いても饑饉の御用心をしてお置きなさいませよ。

それには、ハト麥なんぞは至極よろしいでございます、種子が入用ならば、わしん處へ云つておよこしなさい、蒔き方がわからなければ、わしが教へて上げますよ、もし人手が足りなければ、わしが行つて手助けをして上げますからね。

それからもう一つジヤガタラ薯といふのがございますが、あれは近頃南蠻から來たのださうですが、結構澤山取れて穀類の代りになります、あれをお植へなさい。

さうして、用心をして置いて、いざ饑饉といふ時には、その貯へを大切に控え目にして食べる

です、さうすれば、悪食をしないでも次の實りまで、きつと凌げるものでございますよ。でございますから二宮先生は饑饉の年でも決して、草の根や木の皮を食へとは、おつしやいませんでした。心がけさへして置けば、どんな饑饉にでも五穀を食ひのばして行けるものでございます、饑饉の時は、何でも食べられます、食べなければならない場合もあるでございますが、少しの間は、いいが、長くなると病氣になります。斯ういふ説教を與八が試みました時に、慢心和尚が來合はせて、次のやうな合槌を打ちました。

さうとも〳〵、與八の云う事と二宮尊德の云ふ事は間違ひはないぞ、饑饉は怖いぞ、用心して五穀を貯へろよ、草根木皮は食うなよ、天保の饑饉の時、わしは江戸で見たがな、何しろ作の本場の百姓でさへ食う物が無くて餓え死ぬ世の中だから、町家と來ては目も當てられなかつたよその時の窮策でな、赤土一升を水一升で溶いてな、それを布の上に厚く敷いて、天日に曝らして乾かしてから生麩の粉などを入れてな、それで團子を作つて食つたものもあつたぞ、それから松の枝を剝いで鰍のやうにして食ひ出した者もあつたぞ、わしも食つて見たよ、わしなんぞは腹が出來てゐるから、何を食つても、あんまり當りさわりといふ事は無いが、普通の人間はたんと食へば黄疸のやうな顔色になつて、やがて病氣だ。この間も「救荒草木」といふ本を、わしが處へ

持つて來て見せた人がある、その本には野生の草木で食へるもの〻、種類を三十種も擧げて、その料理方などを書いてあつたが、わしはあゝいふ事はあんまり贊成をせんのだ、わしなんぞは腹が出來てゐる上に、口が此の通り大きいから、何を投げ込んでも大ていは當りさわり無く消化するやうなものだが、人間並の人間は人間並の食物を食うがよい、何せよ、天照大神、神黄農、帝以來人間が擇りに擇り出して來た今日の五穀蔬菜といふものは、人間の養ひには最上無類のものさ、野草雜草も食つて食へない事はないが、食はずに濟めば食はずに濟ます事だよ、誰も食ひたくて食うわけでは無いが、そこだ、日頃の心がけといふやつが其處にあるのだ、丹精して人間らしい作をつくり、それを丹念して圍穀にして置くことだ、それが最上唯一の饑饉救濟策といふものだ、よく〳〵與八大明神の御託宣を聞いて置くがいゝぞ。

それから、若い者は天保の饑饉は知つてゐるが天明の饑饉時代を知る者は少なからう、おれはそれを實地見せられてよく知つてゐるぞ、この村で食へなくなつたものが、隊を成して次の村へと流れ込んだ、流れ込んで見たところで、次の村にだつて、他村に食はす貯穀がある筈はない、そこで、流れ〳〵て毎日毎日、千人、二千人といふものが、固まつて、飢え死してゐる、さうすると先きに飢えて死んだもの〻肉をあとのが切り取つて食つたものもあつたぞ、食うや食はぬの

境になると、人間が鬼になる淺ましさ、おれは此の眼でよく見て來たぞ、その位だから、盜賊が横行する、いや人間といふ人間が皆んな盜賊になつてしまふ、淺ましいものぢや、大名の米でさへも警護が薄いと途中で飢えたる民が襲ひかゝつて奪つてしまふ、それだから、一臺か二臺の車に積んで運ぶ扶持米でさへ、さむらひ共が四五十人して守つて引かせたものだ、村々町々で目ぼしい家屋敷はブちこわしがはじまる、ブちこわされる方も、はじめのうちは辛抱してゐたが、今度はその方で組合を作つて、竹槍を構へて待ちかけ皆殺しにして呉れるといふ有樣だから、全く餓鬼道修羅地獄さ、食ひ物がなくなると政治も奉行もあつたものではないぢや。

だから、百姓は平生丹精してよく作を作り、丹念してそれを貯へて置くことぢや、近ごろ節食節食と云つて、成るべく少し食へといふことを云つて歩るく奴もあるが、わし等がやうなものは小食でもさしつかへないぢや、わし等がやうな坊主とか役人とか學者とかいふやからは、さう大した體力の骨折仕事といふのはせんでも濟むぢやから、さういふやからは云はゞお百姓樣の食客同樣なものだから、成るべく遠慮して、少なく食つてもらひたい、殊にわし等がやうな坊主は少少の間は食はず飲まずでも平氣でゐられる位に慣らして置かなけりやならぬぢや、それで決して身體のさわりになるものぢやないのぢや、一日一食で濟ましてそれで達者で長壽をした坊主も幾

らもあるぢや、東叡山寛永寺の天海和尚と云うのは百三十三歳まで生きたが、これも一日一食ぢや、播州の書寫山の性空上人といふのが、これも一日一食で九十八まで生きたぢや、眞宗の親鸞上人は九十まで生きたが、これも一日一食、伊勢の月僊和尚といふのが八十九、鳥羽僧正が八十八、一休和尚が同年と云ふやうなわけで、かういふ坊主は、いづれも一日一食同然の節食をしてそれで達者で長壽をしたものだが、それは坊主だから出來るので、やつぱりお百姓さんの居候であることには變りはない、お百姓といふ奴は節食をしてはならない、節食をしては働らけないから、うんと食うがよい、大きな口を開いて飯を食う權利のあるのは百姓だけの役德だと思うがいい、うんと食つて、うんと働らき、うんと生産をして、坊主をはじめ役人だの學者だの此の世の寄生蟲に食はしてやつてもらはなけりやならぬ、饑饉の時は、今も云う通り惡食をせず、その時は節食をして一日にお粥一ぱいだけでも食つて、靜かに寢て體力を養つてゐるがいゝ、死なゝい程度に生きてゐるがいゝ、そのうちには凶年といふ年ばかりではないからな。

かういふやうな事を云つて慢心和尚が與八の勸誘に補足をして村人を說得してゐる處へ一人の風來人がやつて來ました。

その風來人といふのは、五十がらみ、小肥りに太つた、笠をかぶつて、もんぺを穿いた旅の者ら

しい一人の男であります。

「わしは、武州刎村といふところの百姓彌之助と申しますが、諸國廻歴の途中、計らずも此の處へ立ち寄りまして、只今のお話を聞かせていたゞき、誠に結構に存じて、痛く共鳴を仕りましたわしが諸國廻歴の目的も、只今のお若衆さんと御出家さんの、おつしやつたと同じ趣意の下に出發致したんでござりますが、何分、德が足りないものでござんすから、折角の志が通らず、わしが本心が通らぬのみか、到るところで馬鹿にされて、どうもなりませぬ、處で、只今のお話を伺つて見ますと、世間にはまだ同じ志の者がある、捨てたものではないと頼もしさ限りがございません、まあ御笑ひ下さい、わし共はかういふ帳面を拵へて諸國廻歴を致して居ります」

と云つて、腰にブラ下げてゐた一册の部厚の帳簿を解いて、慢心和尙と與八の前へ差出しましたから、

「それは〳〵、御奇特な事で」

と答へながら慢心和尙が、その帳面を手に取つて見ますと、

「百姓大腹帳」

と書いてあります、二つ折長綴の部厚の帳面で、俗に「大福帳」型の帳面でありましたが、大福帳を此處には「大腹帳」と書いたところに趣意がありさうなのです、果して武州刎村の百姓彌之助と名乘る男は、その大腹の字面を指してから次のやうに語りました。

「只今もおつしやる通り、近ごろは戰爭や饑饉の心配から、ドコへ行つても食を控えろ、食べ物を食べ過ぎるな、節食をしろ、節米をしろと、專ら、このやうに申觸されて居りますが、わしはそれと違ひまして、百姓は物をうんと食へ、さうして腹を充分にこしらへろ、非常の災難が來る時こそ、腹をこしらへて、度胸を据えなければならない、腹が減つては戰が出來ない道理、ですからウンと食べてウンと働らきなさいと、斯ういふ勸化の爲に、この通り百姓大腹帳といふのをこしらへて、宣傳を致して歩くのでございますが、相手にされないで困つてゐるんでございます、つまりがわしが百姓だから、馬鹿にする者が多いといふわけなんでしてね、わしが、こんなぶつきらぼうの百姓で無く、黄門樣のお微行であるとか、お大名の名代、聖堂の先生とでも云つた經歴がありますと、皆んな感心して聞くんでございますが、なあに、あいつは百姓だ、百姓が何を云ふと、頭から取り合つて呉れません、そこで、わしは考へました、百姓に百姓の心得を說いて聞かすには、先づ「百姓」といふ文字の意義から說いて聞かせなければならないと、この頃では、專ら百姓の名の起りから說いて聞かせてゐるといふやうな次第なんですが、これをまあ一

つお讀み下さいまし」

と云つて、武州刎村の百姓彌之助と名乘る男が、大腹帳の開卷第一を開いて、慢心和尚の前に示しました。

和尚が受取つて、それを讀んで見ると、

そも〳〵「百姓」といふは支那四千年前の古典「書經」並びに「詩經」等に見ゆるを最初とすべし。

「百姓」とは、あまねく人民といふ意味にして、これを農耕者に限りたる約束は更に無し、されば天子以外のものは皆百姓なり。

日本に於ても、古代はこれと典故を同じうしたれば、歴代の天皇、皆直接に人民を呼ぶに百姓の語を以てし給ふ。愚ひそかに數へ上げ奉るに、日本書記三十卷の中に於て、天子おんみづから百姓の語を以て、呼びかけ給へる處七十四ヶ所に及ぶ、殊に　第十六代仁德天皇に於かれては、

「君ハ百姓ヲ以テ本トナス」

「百姓貧シキハ則チ朕ノ貧シキナリ、百姓ノ富メルハ則チ朕ノ富メルナリ」

とまで仰せらる。

まことに、日本は天皇の國にして百姓の國也。天皇は親にして百姓は子也、關白、將軍、國主郡司諸々の門閥は皆後世この百姓の間より出でゝ、或は國家に功あり、或ひは國家に害を爲す、功あるは卽ち天皇と百姓の間を助くるなり、害あるは則ち天皇と百姓の間を紊すなり。

中世以後に漸く「百姓」の名を農耕者に限るようになり行くと共に、これに下賤輕蔑の色を附與したるは、當しく中間勢力の横暴の致す處なれば、日本の政治の革新は、天皇と百姓の間を、古への美風に歸すことなり。

斯く、百姓は卽ち萬民の意味にして、農耕業者に限りたる約束は更に無しと雖も、百姓の基本業は則ち農耕に存すること萬世渝ることあるべからざる也。

夫れ、如何に、世態變化するとも、人は衣食住無くして生くること能はざるなり、而して衣食住の生產は農業を待ち之を爲すより外にその道あるべからず、政治は卽ち此の生產を助長するの道にして、商工は卽ち此の生產を融通するの道也、根幹を侮りて、枝葉のみを繁茂せしむる國は危し。

されば日本の百姓たるものは、自らが　天皇の大御寶（おほみたから）たることを畏こみ、專ら此の道をつと

め、國に三年の蓄あり、人に三年の糧あり、而して後に四方經營を企んにすべきなり。而して後に通商貿易を盛んになすべきなり。本を忘れて、末に走ることあるべからず。

近代は國難内外に起りて、志士東西に奔走すと雖も、國本培養に心を注ぐの士、極めて乏しきは慨すべく歎ずべし。故に良き百姓は、世上の空言虚語に惑はされず、大に食ひて大に働らき、自ら三年の糧を貯うると共に、國に三年の糧を捧ぐることを本意と心得べきなり。百姓大腹なれば國富みて兵強く、百姓空腹ならば國貧にして兵弱し、つとめざる可けんや。

これを讀み了つた慢心和尚は大いに感心して、

「成程、成程 ――その通り、これに違ひない、百姓の本分を知らせるには百姓の文字から説いて聞かすが本筋ぢや、自分が百姓百姓と人を輕蔑する奴から退治せにやいかん、天皇樣と百姓の間をさまたげる、もろ〳〵の寄生害蟲から退治せにや、國は治まるものではござらぬ。百姓大腹ナレバ國富ミテ兵強ク、百姓空腹ナラバ國貧ニシテ兵弱シ、ツトメザル可ケンヤ、大賛成！」

慢心和尚が双手を擧げて賛成したものですから、百姓彌之助も大いによろこびました。

七十四

その前後、京都の二條城で勝麟太郎の受爵の式が行はれました。

夢醉道人の丹精空しからず、あつぱれ幕府旗下の麒麟兒として德川の興亡を肩にかけて起つ人となり、こゝに受爵の恩命が傳はること偶然ならずと云はなければなりません。これより先き、授爵の内命が傳はつた時、勝は考へました。

「さて、受爵には何の國を所望したものか、願はくは日本一の小國を願ひたい」

そこで、安房の守が選まれました、大國を名乘つたところで大國の主となるわけでは無く、小國を冒したからとて、器量が小さくなるわけではないのだが、勝がさらに小國を所望したのは、この人特有の皮肉がさせる業らしい、この人は、後年、功成り名遂げて、維新の功臣の中に加へられ、こゝに再び明治政府の下に、受爵の恩命が行はれるゝ際、子爵に叙せらるゝの風聞を傳へ聞いて、

今までは人並なりと思ひしに　五尺に足らぬ四尺なりけり

と歌をよんで、さてこそ、伯爵に叙せられたといふ傳說のある位の人ですから、さういふ人を食つた性癖が、おのづから小國を好んで所望することになつたらしい。

それはさて置き、當時叙爵の儀が濟んでから、控室に於て、諸士を相手の氣焰の中に次のやうなのがありました。

「政治家の秘訣は何にもないよ、只正心誠意の四字ばかりだよ——內政の事にしろ、この秘訣を知らないから、何うも杓子定規で、さつぱり妙味といふものが無い、德川氏のやり方は、今云つた四字の秘訣を體認して、よく民を親しんで、實地に適應する政治をやつたものだ、その重んずる所は人にあつて法にあるのではない、八代將軍の時に諸法度の類もやつと出來上つた位だが、それにしても北條時代の式目が土臺になつてゐる。あの貞永式目といふのが深く人心に染み込んでゐるものであり、何もわざ〳〵アクドイ新體制を作つて民を惑はすがものはない、この邊をよく注意したものさ」

「東照宮の如きも、駿府に隱居をされた後でも、たゞ、ぢーつとして城內に引き籠つてゐられたわけではない、駿府の近傍の庄屋とか古老とかいふのを集めては、碁の會を催して、輪番にそれ等の人々の家へ碁を打ちに行かれたものだ、あの邊の舊家には東照宮が來て、碁を打たれた座敷だといふのが今だに殘つてゐるよ、道樂で碁を打つんぢやない、あゝしてゐるうちに僞らざる民情が聞けるからだ」

「日本國中で民政のよく行屆いた處は、まづ甲州と尾州と小田原の三ヶ所だらうよ、信玄や、信長や、早雲の遺德はまだこの三ヶ所の人民に慕はれてゐるらしい」

「信長といふ男は、さすがに天下に大望を持つてゐたゞけあつて、民政の事には深く意を用ひて租稅を輕くし民力を養ひ大に武を天下に用うるの實力を蓄へたと見える。今日、尾州に行つてよく吟味して見なさい、當時の善政良法が、今尙ほ歷々として殘つてゐるから」

「信玄が只の武將で無かつた事は一たび甲州に行けばわかる、見なさい、彼地の人は信玄を神樣として信仰してゐるのだ、これは當時民政がよく行き屆いて、人民がよく心服してゐた證據ではないか、その兵法の如きも規律あり節制ある當今の西洋流と少しも違はない、近頃まで八王子に信玄當時の槍法が殘つてゐて、每年二度その槍法の調練をする事になつてゐたが、その槍を使ふのを見ると、近頃の樣にお面お胴といふ風な、個人的の勝負では無くて、大勢の人が一樣に槍先を揃へて、えい〳〵〳〵と聲をかけながら、初めは緩やかに、次第々々に急になり漸く敵に近づくと、一齊に槍先を揃へて敵陣へ突貫するのだ、ちよつと見た處では甚だ迂濶の樣だが、おれは

後で西洋の操練を習つてから、始めて此の法の頗る實用に叶つてゐることを知つた」

「北條早雲といふ男も、中々の傑物であつたに相違ない、赤手空拳でもつて、關八州を横領しうまく人心を收攬したのは中々の手腕家だ、當時、關八州は管領の所領であつて、萬事京都風で、小むつかしい事ばかりであつた。丁度今時はやりの繁文褥禮であつたのだ、其處へ早雲が來て、此の繁文褥禮の弊風を一掃してしまひ、また苛税を免じて民力の休養を計つた。つまりこれで、うまく治めたのだ、德川時代には小田原附近から關東八州へかけてが、全國中で一番地租の安い所であつたが、これは全く早雲の餘澤だ」

「それで北條の亡んだ後に德川氏が駿遠參の故土から、この關八州へ移封されたのだが、もともと、租税の安い處であつたから、德川氏の方では非常に迷惑だつたのだ、大閤といふ男は、なかなかの狡猾者で、よく此の事情を承知して居りながら、所謂、その名を與へて其の實を奪ふの政策に出でたのだ、併し、そこはさすがに德川氏だ、少しも早雲の遺法を崩さず、從來の仕來りに從つて、これを治めたのだ」

「天下の富を以てして、天下の經濟に困るといふ理窟は無い筈だ、古の英雄は皆經濟の爲に苦心したよ、織田信長は經濟上の着眼が周密であつたから、六雄八將に頭となり得たのさ、南朝の政治も北朝の細川頼之の經濟の爲に倒れたのだ」

「おれが始めて、アメリカへ行つて歸つた時に、御老中から『其方は一種の眼光を具へた人物であるから、定めて異國へ渡つてから、何か眼をつけた事があるだらう、それを詳らかに申述べよ』との事であつたから、おれは『人間のする事は、ドコへ行つたつて、さう變るものぢやありません、アメリカだつて御同樣ですよ』と云つたが再三再四、問はれるから『左樣、アメリカでは政府でも民間でも、凡て人の上に立つ者は、皆んな相當りこうでございます、この點ばつかりが、日本と反對のやうに心得ます』と云つたら御老中が眼を圓くして『此の無禮者奴、控え居らう』と叱つたつけ。ハハハハハハ……」

「支那人は、一體氣分が大きい、支那人は天子が代らうが、戰爭に負けようが、殆んど馬耳東風で、はあ天子が代つたのか、はあドコが勝つたのかなど云つて平氣である、ソレも其の筈さ、一つ帝室が亡んで、他の皇帝が代らうが、國が亡んで他の領分にならうが、全體の社會は依然として舊態を存してゐるのだからノ――」

七十五

斯様に天下有事、幕政維持か、王政復古かの瀬戸際、それに外國の難題が攘夷か開國かで、怪奇ではないが、複雑を極めた間にあつて、一歩過まれば、社稷が取り返しのつかない事になる、志士仁人が往來し、一般人心がおびえてゐるうちに、廣い世間には極めて暢氣千萬な奴もあればあるもので、道庵十八文の如きその一人。

且又、媚態百出、風向きのいゝ方へ便乘しようと、色目の使ひ通しな不都合な奴もあればあるもので、鏢公の如きがその一人。

さても、山城の國綴喜の郡田邊の里に、逗留の道庵先生は、健齋老の取持で、何もございませんがと云つて、上方名物のよき酒に、薪納豆を添えて振舞はれたものですから、大によろこびました。

これは酬恩庵名物の一休禪師傳來、薪納豆といふものだと聞かされて、道庵がなつとうしました。

道庵は、この機會に一休禪師の研究をはじめる事になりました。道庵も一休は話せる男だと思ひ、一休の方では道庵は知らないと云つてゐる。いづれにしても、醉眼に人無き道庵も一休禪師には一目位は置いてゐるらしい、これから大阪へ行つて、一つ親類のお墓參りもしてやらずばなるまいと、酒の間に口走つたところを見ると、大阪あたりに親類などは無かるべき筈の道庵が、變な事を云ふと思つて、問ひたゞして見ると、大阪に永富獨嘯庵の墓があるから、それを一つ訪ねてやらうと思つてるんだよといふ、して見ると、永富獨嘯庵なるものは道庵の親類筋に當るのかも知れない。

それはトニカクとして、この機會に道庵は酬恩庵をおとづれて、故蹟をたづね、筆蹟を見て、しきりに慈姑頭を振り立てました、山陽の書を見て臭れの、華山の畫を鑑定しろのと、申込んで來る茶人もゐたが、そんなのは一切道庵の眼中に無く、一休禪師の筆蹟だけは相當丹念に見ました、一休自筆の「狂雲集」といふ奴も見て、しきりに首をひねつたり、その末期の書だといふのをひろげると、

須彌南畔
誰會我禪
虛堂來也
不直半錢

東海純一休

と書いてある、同行の者がちよつと讀みなやんでゐるのを、道庵はスラ〳〵と讀んでしまひました。

須彌南畔
誰カ我ガ禪ヲ會スヤ
虛堂來也
半錢ニ直セズ

東海純一休

スラ〳〵と讀んでしまつてから、慈姑頭を更に一倍振り立てゝ、

「諸方に一休の書と稱せられるものが相當あるにはあるがね、あんまり感心しないよう、ところで、こいつはいゝぜ、こりや、たしかに一休の書だよ、一休といふ奴あ、かういふ字を書かなけりやならねへ奴なんだ、こりやいゝよ、句もなか〳〵いゝよ、たゞ、虛堂來也――素人はこれをキヨドウと讀みたがるが、いけねえよ、キドウと讀まなくちやいけねえ、たゞ此の虛堂來也がねへ、ちつとばかり小せへよ、道庵に云はせると佛祖來也と行きてへところなんだが、それはそれとして、此の辭世の文句にもはじめてお目にかゝるよ、一休名所圖會（一休諸國物語の誤ならん）にも、辭世の句といふのが幾くつも出てゐるが、この文句は無え、名所圖會のがニセ物で、これがホン物だ」

と云ひました、道庵が多少共に物を賞めるといふことは、極めて少ない中のこれもその一つでございました。

さうしてゐるうちにも、お雪ちやんの容體を見てやる親切は變りません、脈をとることになると忠實なもので、商賣柄、健齋老を啓發することも少なくはありません、それから健齋老が道庵に感心してゐることの一つは、そのふざけた中にまじめな研究心が少しも衰へてゐないといふことです。見るもの、聞くもの、皆んな箸をつけずには置かない、箸をつければ皆んな食つてしまはなければ置かない、といふ智識の貪食ぶりには、遠近四方敬服せざるを得ませんでした。

併し、うつかり敬服ばかりしてゐると、その次があぶない、一夕、道庵の聲名を聞いて、京から名酒を取り寄せて、贈り越したものがあつて、

「この地は、お茶にかけては日本一ですが、お酒の方はさうは行きませんが、こゝらあたりは少し飲めるかも知れません」

道庵がその尾について、

「成程、お茶は、この界隈が宇治茶の本場だが、酒もどうしてなか〳〵馬鹿に出來ねへ、一たい上方は酒がよろしい、日本一のお茶も結構だが、日本一の酒は飲みてへな」

それを云ふと、土地の人が、

「では、近いうち、その日本一の酒といふのを飲ませて進ぜませう」

「そいつは耳よりだぜ、一たい、池田伊丹なんぞと、大ざつぱに名乘は聞くが、さあ、どれが日本一だと聞かれたら上方でも困るだらう、道庵も人に聞かれて、その點、常にいさゝか、テレてゐる、今度といふ今度は、一つ、京大阪の酒といふ酒を飲み拔いて、道庵先生御推賞日本一といふ極め(きはめ)をつけて歸りてへものだ」

「いや、それは先生を煩はすこと無く、もう出來て居りますよ、日本一の酒といふ極めつきは……」

「おや〳〵、道庵の承認無しに、酒の日本一を定めるなんて、不届な話だ、萬一、道庵が不服を唱へたら、どうするつもりだらう、一番そいつの再檢討をして見てへ、その日本一の極め付の酒といふのは一たい何といふ酒でドコから出ますねえ」

「これより少々南の方、河内の國の天野酒(あまのさけ)、これが日本一といふ定評になつて居ります」

「うむ――河内の國の天野酒、聞いたことのある名だ、これは一つ道庵が再吟味をする必要がある」

と云つて、その翌日、飄々として出かけて歸らないところを見ると、河内國までのしたのかも知れません。

七十六

さて、江戸の方面に於ける軟派、鑢(びた)は鑢(びた)で、この頃、少し憂鬱(いううつ)になつてゐる。

鑢としては、折角のヒットたる藝娼院の方も、開店休業の姿だから、何とかせねばなるまいがいやはや、手をつけて見ると、そのやゝこしい事、それで少々氣を腐らせてゐるといふ次第です。

藝娼の藝娼たる所以のものを說いて開かせても、世間はなか〳〵わかつて呉れない、取り敢へず鑢(びた)の方へ持ちこまれた苦情のうちの一つに、

苟も藝と名のつく以上、ナゼ役者を入れない、藝人の王たる役者を入れないとは何事だ、と力んで來た！

それから、藝事の藝事たる目きゝといふものは其の道のものがしなければならない、金茶や木口の輩が御右筆の下つ葉のおつちよこちよいを相手に人選をするとは怪しからん。

と云つて、膝詰で來たものもあれば、ビタちやんのお袖にすがつて、是つぴ、お刺身のツマになりともありつきたいと歎願に及んで來た奴もある。

その邊は、ビタちやんだつて、心得たものなんだが、何を云うにもそれ、役者の方から云つて見るてへと、愚左衞門を入れゝば、轟四郎が納まらないし、毒五郎をのけて戸團次に戸惑ひをさせるわけにも行かねへ、さうなるとまた土右御門や狢之助の方のひゐきが承知しない、トカク、これは難物だから後廻し後廻し。

繪かきの方は、昔しから相場附けが、ほゞ定まつてゐるから、これは割合に手なづけ易いが、文書きの方はトカク店が新らしいだけに品がやゝこしくていけねえ。

繪かきが五十八人もゐるのに文書きが十人ぢやあ、あたじけねへとムクれる奴には、刺身のツマとしてお下がりを宛てがつて置いたが、此の頃、木口勘兵衞尉源丁馬と金茶金十郎とを入れろぜつぴと云つて推薦して來た奴があるが、こいつは鑑も買へねへよ。

金茶や木口は、武藝もやつぱり藝の中だから藝娼院へ入れろ、刺身のツマでもいゝから入れろと捻ぢ込んで來てゐるのだが、どうも、さしも悪食のビタにも、こいつは、ちつと買へねへよ。

成程、武藝も藝には違いないが、あいつらの藝は下町の藝で、デモ倉流盛んな時はデモ倉流、ブロ龜派が景氣のいゝ時はブロ龜派、勤王がよければ勤王、佐幕がよければ佐幕で、風向次第、どつちでも御用をつとめる大道武藝者だから本當の藝人の中へは加へられねへ、大道藝人の方では、あいつらが大御所面で納まつてゐるけれども、公儀には柳生流といふお留流儀もあれば實力第一の小野派一刀流といふれつきとしたのがある、木口や金茶の大御所流を入れる事は、三下奴ならば知らぬ事、ビタちやんとしては聊か氣がさすねへ、なあに御祐筆の方へ申込めば、御祐筆は皆んなお人良し揃ひだからビタちやんの云ふなりにはなるがね、ビタちやんの眼鏡の貫祿として、さう安賣は出來ねへ。

鑑は、といつ、おいつと、こんな事を言つて、自宅にくすぶつて、氣を腐らせてゐると、薄板を荒々しく蹴鳴らして、

「鑑公、居るか」

その聲は、まさしく、木口勘兵衞尉源丁馬。

「來たな」

と鑢は思ひました。

ガラリと腰高障子を引きあけた木口勘兵衞尉源丁馬は、朱鞘の大小の殊に、イカついのを差しおろし、高山彦九郎もどきの大きな包を背負ひ込んで、割鍋を叩くやうな大音を振り立て、

「鑢、ゐたな、今日は一つ、手めへに膝詰談判に來たんだが、このお爺さんを一つ、藝娼院の人別に入れて呉んな、これは木曾の藤兄いと云つて、姪を孕ませて子まで產ませて追ん出した上にそれを板下に書いて賣り出した當代の甘いおやぢさんだ、文書きの方では古顏なんだが、近ごろ拙者の子分同樣になりやんした、宜しく賴む」

〉高飛車に出られたので、鑢もあつけに取られてゐると、

「さあ、お爺さん、こつちへ來て、藝娼院の人別に入れてもらひねえよ、これがお安いところの鑢公といふおつちよこちよいだ、お見知り置きなせへ」

といふから、鑢が木口の後ろを見ると、いかにも人の良さゝうな老爺が一人、なべーんとした面をして、しよんぼりと控えてゐる、その姿を見て、鑢が、なるほど姪を孕まして、板下に書いて賣出しさうなおやぢだ、至極お人良しだなと思ひました。だが、いゝ年をして、木口あたりの手下になつて、頭を下げに來る、老爺の人のよい姿を見ると、鑢も物の哀れを感じないわけには行きません。

木口の後ろには、まだ、これを親分と賴むイカモノが多分に控えてゐる、これ等を押し並べて、

「さあ、面が揃つたら一つこゝでパチリとやつてくんな」

當時、舶來の珍らしい早取機械を据えた三下奴、

「爺つあん、お前も下つ葉の方へ座りな」

信州から來た木曾の藤爺さんを、下つ葉に押し据えて、木口勘兵衞尉源丁馬が傲然として、正座に構へた處を見ると、さすがの鑢も悲鳴を擧げ、

「トテモ、受けきれねへ」

と云つて、逃げ出してしまひました。

下駄をひつ提げて、溝板のところを這々の體で逃げ出した鑢助。

「どうもはや、木口勘兵衞と來ては、さしもの鑢も受けきれねへよ、あいつイカモノ作り四國猿の癖にいやにアブク錢の錢廻りがいゝもんだから、トカク錢の力で、八方袖の下撫斬流と來るから

受けきれねへ」

七十七

勝安房守が、二條城で任官して後の事、近藤勇と土方歳三の二人が、慷慨淋漓として、二條城の天主臺の上に立つて、洛中洛外の大觀を見澄まして居りましたが、やがて近藤が云ふ事には、

「どうだ、土方、おれに十萬石を與へれば、此處に居て天下を定めてしまうが、あつたら城に主がないなあ」

さうすると、土方が之に答へて、

「敢て、十萬石とは云はない、五千の兵を與ふれば、イヤ五千とも望むまい、二千の精兵を與うれば、天下の事を定めて見せるがなあ」

と云つて兩士は相顧て撫然たるものがありました。

今、京中に於て、近藤勇の名は鬼の名と等しい、其實力はほゞ諸侯と等しいものがあるが、何を云うにも、二人は武州の一塊の土民の出であつて、譜代がある譯ではない、羽翼がある譯では

ない、會津を背景にして、その配下僅かに二百人足らず、やがて會津が百萬石になれば、近藤も十萬石だなどゝのし上げるのは、取るに足らぬ沙の上の功名話で、會津どころか德川宗家そのものがあぶない今日、彼等とても、百萬石や十萬石の夢を見乍ら受負仕事をしてゐるわけではない、近藤勇としても功名利錄以外に已むに已まれぬ慷慨を感じてゐるものがあるのです。

「織田信長もいけないよ、これ程の城を信忠に預けて、市中の本能寺あたりへ手ぶらで泊るといふ事があるものか。この城へ納まつてさへゐれば明智如きに齒が立つものではない。名將と雖も運の盡くる時は是非のないものだ、まして、名將に非らざる凡將に於てをや」

近藤が斯う云ひますと、土方がそれを受ついで、

「慶喜公も、ドッシリと此處に納まつて、動かなければいゝに、やゝもすれば動きたがつて腰が据らない、悲しいかな、今の德川にこの二條城へ座りきれる人がゐないのだ」

斯くて二人は頻りに天主臺の上から飽かずに洛中洛外の風景と、二條城の規模を見渡して居りましたが、

「京都に於ける二條の城と、江戸に於ける東叡山とは形式が違つて立場は同じだ、この二條城を守りきれるや否やで京都に於ける德川の勢力が決する、東に於ては、よし、江戸の城が落つると

も、東叡山に於て德川旗下の意氣の死活が示されるのだ」

と云ひました、二人の慷慨の語氣で察すると、この城を二人に任せる限り幕府の社稷を死守して見せる意氣込は充分だけれども、その貫祿の備はらざる事にぢだんだを踏んでゐるやうにも見られます。且又、これだけの備があつて、人が無い事を、三百年の德川の爲にも大息してゐるかのやうにも見られます。

無名島に上陸した、無名丸の乘組のうちに、書き漏らされた存在として、柳田平治（やなぎだへいじ）と金椎（キンツイ）とがあります。

柳田は、最初から駒井船長を、蟲が好かない唯一の存在でありましたから、勤めて之に近づかうとしない、其位だから船中の誰もに親しみを持たないし、船中の誰もがまたどうも山出しのブッキラ捧な青年で、且つ好んで長い刀をひねくり廻したりなどするものですから、氣味を惡がつてのけ者あつかひにしてゐる。たゞ一人田山白雲にだけは親しみを持つものですから、田山と二人が、別棟をこしらへて植民地に住むといふやうな有樣です、然し、柳田は田山程に世界を知らないし、又超世間の美術に沒頭するといふ術を持たないから、田山の爲に寫生旅行の助手を務めようといふ氣にもならず、默々として働らくだけを働らき、その合間には、長い刀を振り廻して居合の獨稽古をしてゐるだけのものです。

柳田が、すつぱ抜きをしてゐる所へ、白雲が通りかゝると、それに引き入れられて、同じやうに居合を試みて見たり、それが嵩ずると眞劍で型を使つてみたりするのでありますが、又時としては眞劍や白刃を取らずに素手でやわらの亂取りを試むる事などがあります、丁度その場へ七兵衞が來合せた時などは、非常な興味を以てながめてゐることもありますが、武術にかけてはさしもの田山白雲も、この青年をあしらひ兼ねてゐるのであります。

そこで、七兵衞が思ひつきました、今後一週に二三回位づゝ、この青年を指南役として、島の人の凡てに武藝を仕込んで置けば、何かの役に立つ、さう思つてその事を田山白雲に相談すると白雲は直に同意し、柳田平治も、好きな道であり、自分も練習になるから異議なく之を引受けて早くもこの島に一箇の武術道場が出來上るといふことになりました。

今日は大變暑いものですから、田山白雲と柳田平治は一番泳がうではないかと云つて、海へ飛び込みました。二人共、水練は達者です、さんぐ〳〵に泳いで陸へ上がり、裸のまゝで砂ッパに寢ころんで話を初めました。

「田山先生、日本は之からどうなるのです」
「さうさなあ、今頃はどうなつてるかなあ、西と東に別れて、戰爭でもおつ初めてゐはしないかなあ、わからんなあ」
「日本で東西が爭うとなると、どつちが勝つのですかねへ」
「それもわからんなあ、日本に居るとさういふ事に素的に氣がもめたが、斯うして大海へ乘出して來て見ると、そんな氣持がカラリとしてしまうのは不思議だね」
「田山先生、貴方はもう日本へ歸らないのですか、歸り度く思ひませんか」
「歸らないと斷言は出來ないねえ、然しこれ迄乘り出して來た以上は、こつちで相當成功して、向ふの妻子をこつちへ呼び寄せ度いと云ふ希望の方が先だねえ、だからこの無人島が永住の地だとも思つてゐないよ、こゝへ足がゝりが出來たら、この先の方には大陸があつて、そこには日本よりも何倍も開らけた國があるのだから、そつちへ行つて、第二の山田長政となることも愉快だと思つてゐる」
「僕も、さういふことを考へて居ます、僕はそんな開けた國よりも野蠻人のウンとゐる所へ行つて、そいつらを皆んな制服して、王になりたいです、こんな無人島では物足りないです」

こんな話をしてゐたが、やがて、むつくりと跳ね起き、裸のまゝで二人は椰子林の中を歩き己の小屋へと歸りに向つたが、椰子の林の中のとある木蔭に小さな人影が一つうづくまつてゐるのを見ました。
「あゝ、金椎(キンツイ)だ」
と云つて二人は遠のいて避けて通るやうにしましたけれども、避けなかつたところで、相手は氣がつく筈もなかつたのです。
「相變らず、イエスキリストを信じてゐるよ」
と田山白雲が云ひますと、柳田平治が、
「ちえッ、キリシタン！」
と嚙んで吐き出すやうに云ひました。

大菩薩峠（第十八册　椰子林の卷　終）

昭和十六年八月十七日　第一刷印刷
昭和十六年八月廿日　第一刷發行

大菩薩峠（第十八冊）

㊙【定價金壹圓七拾錢】

著作者　中里介山（東京市日本橋區縣服橋二ノ五）
發行者　野口兵藏（東京市牛込區矢來町三六）
印刷者　本間淳三郎（東京市牛込區矢來町三六）
印刷所　清揚社（東京市神田區美土代町五ノ六）
製本所　山口製本所

東京市日本橋區呉服橋二ノ五
發行所　大菩薩峠刊行會
電話日本橋一七七番
振替口座東京七五八三〇番
藏版　隣人之友社

（小社發行書籍中亂丁、落丁等の不完全品があります。した節は御申出で下さい。早速御取替致します。）

（日本出版文化協會會員登錄番號116024）

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元　日本出版配給株式會社

大菩薩峠

新定版・普通版

定價各冊四十錢　壹圓五拾錢（但第十冊に限り八）　壹圓七拾錢

第一冊　甲源一刀流の卷　鈴鹿山の卷　壬生と島原の卷　三輪神杉の卷　龍神の卷　間の山の卷

第二冊　東海道の卷　白根山の卷　女子と小人の卷　市中騒動の卷　駒井能登守の卷　伯耆安綱の卷

第三冊　如法闇夜の卷　お銀様の卷　慢心和尚の卷　道庵と鰡八の卷

第四冊　黒業白業の卷　安房の國の卷　小名路の卷　禹門三級の卷

第五冊　無明の卷　白骨の卷　他生の卷（上）

第六冊　他生の卷（下）　流轉の卷　みちりやの卷

第七冊　めいろの卷　鈴慕の卷　Oceanの卷

第八冊　年魚市の卷

第九冊　畜生谷の卷　勿來の卷

第十冊　辨信の卷

第十一冊　不破の關の卷

第十二冊　白雲の卷　膽吹の卷

第十三冊　新月の卷

第十四冊　恐山の卷

第十五冊　農奴の卷

第十六冊　京の夢あふ坂の夢の卷

第十七冊　山科の卷

第十八冊　椰子林の卷

隣人之友社編纂

◇◇日本百姓道文庫◇◇

第一冊　佐藤信淵抄　B六判　定價八拾錢　一三六頁

第二冊　宮崎「農業全書」上　B六判　定價壹圓貳拾錢　二一六頁

第三冊　宮崎「農業全書」中　B六判　定價壹圓貳拾錢　一九六頁

第四冊　宮崎「農業全書」下　B六判　定價九拾錢　一四八頁

第五冊　二宮翁夜話　B六判　定價壹圓八拾錢　三五六頁

第六冊　義農作兵衛傳　近刊

第七冊　大原幽學抄　未刊

第八冊　大藏永常抄　未刊

第九冊　報德記上　未刊

第十冊　報德記下（以下續刊）

東京　大菩薩峠刊行會　日本橋

中里介山著

百姓彌之助の話

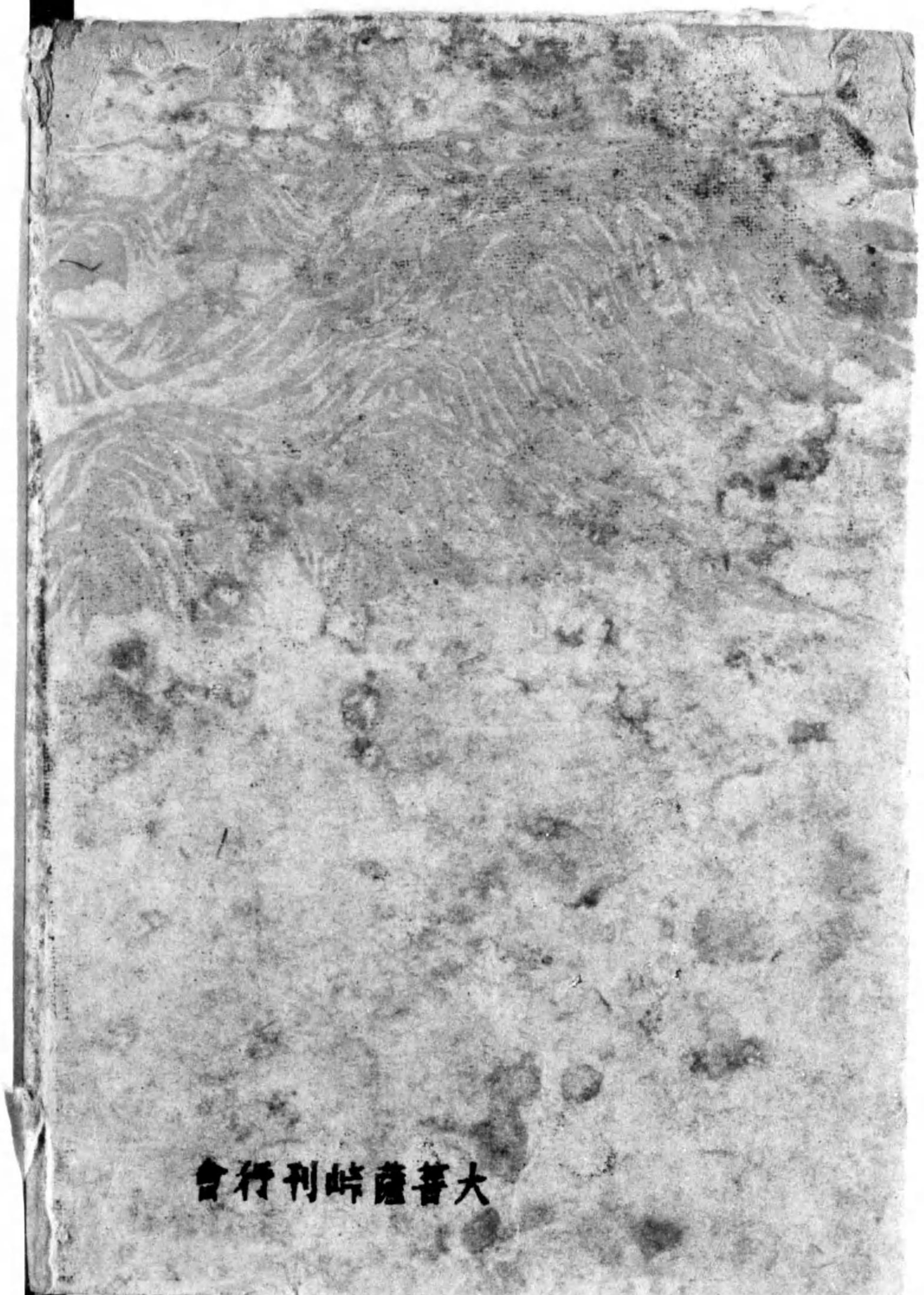
第一冊	第二冊	第三冊	第四冊	第五冊	第六冊	第七冊
植民地の卷	塾教育の卷	土を讀むの卷	イワンの馬鹿の卷	國民皆農論の卷	日本百姓道の卷	リンコルン角度の卷

『百姓彌之助の話』は此の男が、僅かに一町歩の天地の間から見た森羅萬象の記錄である。これこそ眞に『葭の髓から天井をのぞく』小説中の小説、囈語中の囈語と云はなければなるまい『大菩薩峠』が材を日本の幕末維新の時代に取つた一つのロマンスであるとすれば、この『百姓彌之助の話』は支那事變といふ歴史的空前の難局の間に粟粒の如く置かれた百姓彌之助の、現實に徹した生活記錄である。――文學の形式としては、甚だ異樣にして新規に屬するものであるが大菩薩峠が出てから、所謂文壇の小策士共は、大衆文學といふ意味不明瞭の標語を製造して故らに大菩薩峠著作にまで押つけた例もある故に、それ等の豫防として、假に名けて此の形式を『綜合文學』と呼んで置く。――と著者は語つてゐる。

本書は四六判毎冊百五十頁內外を基準とし、毎冊讀切、全體には全體の體系があり、各冊には各冊の獨立內容を盛つた警世的大文章である。既刊七冊、以下年々數冊宛續々執筆刊行の豫定である。

定價 各一冊五拾錢（送料拾錢）

東京市牛込區早稻田鶴卷町三〇〇番地 **隣人之友社** 電話牛込六八六九番 振替東京七五三三一番

417
198

終